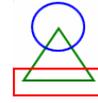


# 研究所通信



2007年つゆいり号  
藤田佳代舞踊研究所  
神戸市東灘区住吉本町1-4-4  
TEL・FAX 078-822-2066  
Eメール fkmds@muf.biglobe.ne.jp  
URL <http://www2s.biglobe.ne.jp/~fkmds/>  
JWORDで検索するなら・・・モダンダンス.jp

今年は30回目！ 発表会の練習が始まりました

第30回藤田佳代舞踊研究所発表会 2007年10月7日(日) 神戸文化大ホール

## 第30回発表会のプログラム

ひとつめはカッパのポッチの心にすき間が出来て もとは何があったんだろう どうしたら埋められるのかなあと考えているところからお話が始まります。山の仲間たちが集まってきて すき間の埋め方をはなしてくれま。さてどんな方法があるのでしょうか。保護者の方 あなたはどんな方法で埋めてきましたか。生徒たちにこれからの長い人生を生き生きと生きていってほしいのでこの踊りの中にひとつでも参考になるものがあるといいのになと思っています。ふたつめは もし地球から飛び出して ちがう星にすむとして どんな国がいいですか どんな国を創ろうと思えますかという問いかけを自分にしました。身が安全で 食べること 着ること 住まうことが保障される国がまず第一の条件だと考えましたそれならばこの地球にも実現できないわ。空の鳥 海の魚 大地の花や木や虫や獣たちは 国や国境など知らずに行き交っていますヒトもきっと知恵を集めて考えれば・・・戦争がなく 飢餓がなく 安心して身を横たえる場所がある すべてのヒトがこんな環境のもとで鳥や魚や花や木や虫や獣たちと生きることができまうように と祈りながら踊りの台本を作っています。藤田佳代

発表会も今年で30回。確か1回目は「わたしのいいもん箱」で・・・。ということはずーっと参加してきたってこと?! あら まあ。今回は「かっぱのポッチが」でキツツキを振り付けます。キツツキって木をつついて虫を食べますが、きっと身体の栄養だけでなく心の栄養もとっていると思いませんか。樹の精にちょっと抱かれていたいなあ、そんな思いを有野、常吉、山本教室、そして今回ははじめて西和教室からも4名が出演して踊ります。寺井美津子

30年前。まさに第1回発表会が、目前! という時に私は研究所の門をたたきました。コンクリートの床の横屋会館がおいこ場でした。先輩方の頭を左右に激しく振り、手を口に腹の底の底から何かを吐き出すような動きに、私は絶句! 無意識に涙が・・・。(涙腺弱い私でしょう。踊りそのものを観て涙した経験はありませんでした。)魂が揺すぶられたというか、心が震えたというか、頭を殴られたというか、「私のいいもん箱」の1シーンに衝撃を受けました。これが佳代先生との運命の出会い。そして、佳代先生自身が踊られた作品も数多くありますが、私は、その度感動して涙腺がゆるんでしまいます。踊りでこんな心地のよい泣かしかたのできるダンサーになりたいと願って、踊って30年。今、研究所にはそんな感動を与えてくれるダンサーがたくさんいます。密かにウルウルするのは私だけではないと思いますが・・・。これは、佳代先生の大きな大きな愛と祈りが踊りの原動力となっているからだだと確信しています。30回めの発表会もきっと誰かの心を揺さぶる出会いの場になることでしょう。金沢景子

初めて発表会の振り付けをさせていただいたのは「めむしりこいちゃんすび なんのじゅもん?」という作品のリスの場面でした。振りうつし最初の日には、こんな振りで踊ってくれるのかな・・・と緊張して緊張して、何回も復習してレッスンに臨みました。みんなが踊ってくれたときの感動ときたら・・・。「踊ってくれてほんとにありがとう」・・・と、生まれて初めて心から人に感謝した瞬間だったかもしれません。そんな初々しい頃もあったのです。時々そのときの事を思い出すようにしなければ! 今年私は振り付けを担当していません。ほかの先生たちが、音が決まらない、配役を決められない、と悩んでいるのがうらやましいわがざりです。出演者の顔を一人一人思い浮かべながら、配役や振りを考えるのは本当に楽しいものです。藤田佳代舞踊研究所発表会は今年で30回目を迎えます。私の初舞台は「風が運んだ8つのおはなし」。白い風の役を踊りました。初めての出演だったので写真を見て、ああ踊ったんだと思うくらいであまり覚えていないのです(小さかったからではない)。一番印象に残っているのはその二年後の「空を駆ける天馬」という作品です。同じタイトルルの歌にここが佳代先生に、発表会はこの話にしてくださいとお願しました。地球の子供たちの願いを赤いカーネーションに託して、天馬は宇宙へと駆けていきます。「地球から戦争がなくなりますように」という願いを託された天馬は、まだ帰って来られずさまよっている、という終わり方でした。その後何回か天馬は発表会にこっそりと姿を現しています。地球上ではない場面で、赤いカーネーションを持って。天馬の役をする人には必ず「うちの天馬はね、赤いカーネーションもってるねん。何年も前に旅立ってまだ帰ってこれへんねん。戦争なくなっていないもんね・・・」と話します。何年後に「グレートジャーニー。天馬が地球へ帰ってきた」なんていう作品ができることを願います。菊本千永

トカゲ(若江岩田、山の街、西山)

この作品を担当することになり、まずはトカゲとオーロラについて調べました。

わたしたちが普段目にするトカゲはニホントカゲという名前だそうです。背中が金属光沢があり、しっぽはきれいなメタリックブルーになっています。オーロラはカナダやアラスカ、南極の昭和基地でもよく見られるそうです。そしてオーロラの基本的な色は赤、緑、ピンクまたは紫です。

ポッチのところにすき間があるように トカゲにもあります。トカゲは自分のピカピカの背中や青いしっぽを見るたびに、ボクのご先祖のオーロラのことを考えます。そして風が運んでくれた あか、みどり、ピンク(ブルーも登場する予定)のオーロラたちと踊ります。その踊りの輪はオーロラオーバルと呼ばれていて 宇宙からみると地球の上に乗っかる大きなドーナツのような形をしています。その輪は大きくなったり小さくなったりしながら、ポッチも仲間に入れてくれます。

フキノトウ(加古川)

「闇の中で目をつむって見たら何が見える?」わたしはジュニアクラスみんなに尋ねました。「光!」すかさず松本佳子さんが答えてくれました。「ほまや〜」「マジ〜?」という会話の結果、ジュニアクラスメンバーは天からの光の梯子を踊ることになりました。そこから降りてくるものはなんでしょう? やっぱ天使がいいなあ。児童科メンバーに踊ってもらいたい。風が吹くと、春の使者のフキノトウの登場です。あのなんともかわいらしい形を表現できるのは やはり小さくて愛らしい児童科メンバーを置いてはかまいません。踊りの中でフキノトウたちは目をつぶってみます。一人のフキノトウはポッチの目をやさしく手で覆ってやります。すると天から光の梯子が射ってきて、その梯子を伝って天使たちが音もなく降ってきます。ポッチやフキノトウたちの周りはパーッと明るくなりました。そんな踊りにしたいなと創作中です。かじのり子

今回の発表会は記念すべき30回目! !今からとても楽しみです。さて、西神教室・学が丘教室の生徒さんはキチョウと雨になってカッパのポッチと出会います。「キチョウさんたちの心にすき間ができた。雨が歌をうたってくれる」って、私は雨の日があまり得意ではないのでキチョウさんがとてもうらやましい!

きっと楽しい素敵な踊りになると思います! どうぞお楽しみに!!

この踊りをきっかけに私も雨の日が好きになれたらいいなあ・・・そんな期待も持ちながら、今からほんとに楽しみです! これは余談ですが、どうやら私は雨女のようなようです・・・(泣)月に隔週であるコープ塚口のお稽古がある日は9割がた雨・・・(いつも生徒さんにつっこまれています。)去年は今年こそは! と意気込んでスケジュールのあい間をぬってやっことさった阪神タイガースの甲子園でのチケットだったのに・・・雨(号泣)毎日、傘を持ち歩かなければダメかしら? ? 向井華菜子

## おわりました ありがとうございます

### 創作実験劇場 2007年3月11日(日) 兵庫県芸術文化センター小ホール

今回も多くのお客様に観ていただくことができました。ありがとうございます。照明のコンピュータトラブルで開場が30分、開演が15分遅れてご迷惑をおかけしましたことをお詫びいたします。辛抱強くお待ちくださって本当にありがとうございました。批評家のうらわまこと先生と白石裕史先生が舞踊新聞に批評を載せてくださいました。また、上海太郎さんが評を寄せてくださいました。

社会的な視座にたつて着実に活動を続けている藤田佳代。流行に左右されることなく、しっとりとした動きとその構成、そして照明、美術によって自らのスタイルを確立している。メンバーに積極的創作機会を与えるのもこの特徴。今回は幹部クラスが群舞作品を、それに続くクラスがソロ作品を発表した。そのなかで佳代も三つの作品を創作。まず注目のダウン症のダンサー安田蓮美のための『ハズミ in summer』。セミ取りの少年に扮した彼女をファンタジックに虫や女神、そして幼児の妖精たちが取り巻く。彼女はソロ、デュエットなど活躍、豊かな表現で観客を惹きつける。対照的なのが『開く』。戦死した恋人の遺品である帽子に挟まれた手紙を開き、戦いの悲惨さ、愚かさをアウシュビッツ鎮魂(ヴィクトル・ウルマン曲)によって表現。遺品の軍帽をかぶる女性を多くの群舞が取り巻き、象徴的にその心情を描く。もう一作『黒と白のエチュード』。ギターの名演奏(佐久間優)で、赤、緑、青を基礎に、その上に立つ黒、溶け込む白との関係で社会のあり方に挑む。メンバーの群舞作品。寺井美津子『そのむこうへ』。日本的雰囲気のもと、人間の営みと自然への祈りを表現。今回休演の菊本千永は、箱を運命の記号として使い、白と黒で心理を描くデュオ『GIFT』。播かれた種が芽を出し、厳しい状況の中で成長する姿をしつとりとみせたかじの子の『keep out』。微妙に色の異なるドレスのダンサーが組み合わせを変えながら、自然の摂理を描いた金沢景子の『まわるたま』。それぞれ個性的ながら、エネルギーをうちに秘め、陰影と安らぎの中に意味を伝える点では、みな共通のものがある。ソロ作品は、夜の都会的ドラマを演じた鎌倉亜矢子、豊かな舞踊言語を織り込んだ灰谷留理子、そして力強い演技をみせた向井華奈子と、精一杯自己を表現していた。

国際的には核とテロ、国内的には憲法改定の動きなど、戦火の暗雲を身近に感じられる時代になった。2回もの大戦を含む戦争の惨禍の記憶と反省はどこへやら。だが、戦争を忘れない真摯な取り組みもある。最近のモダンダンスの舞台を紹介する。

戦死した男性の軍帽の内へりに、一枚の紙片が挟み込まれていた。それを恋人が開くことから舞台は動き出す。紙片には詩が記されていた。「空には鳥が、海には魚が、大地には花が、国境もなく。だが、人はまだ戦争を。鳥、魚、花をイメージしたダンサーたちが優雅に踊り、戦火に苦しむ群舞が続く、それらを縫って軍帽の女が足どり重く彷徨する。背後に流れるのは「戦争とは愚かなことだ」という意味を含む詩「バルバラ」を説くジャンソン 歌手イブ・モンタンの声。アウシュビッツで死去した作曲家ピクトル・ウルマンの「ピアノナタ第7番」。生きとし生ける者の美しい世界と対比させながら、人類の罪業を喚起させた巧みな舞台だった。

藤田佳代舞踊研究所創作実験劇場を見て考えた

佳代先生とこの蓮美ちゃんのおどりにには毎ししいわいづもがつんとやられる。彼女の踊りには踊る喜び、生きる喜び、そんな単純だが力強いものがあふれている・・・いや、そんなことは今さら私が言うまでも無い。その裏にある事実が、誰もが感じながら口に出すのがおぼやられる事実がまるで見慣れた風景のように横たわっている。蓮美ちゃんの方が自分より拍手をたくさんもらって他のダンサーは毎しくないのか？

蓮美ちゃんへの佳代先生の振付けはベタである。ダンサーを鼓舞し観客を喜ばせる為に直球をど真ん中に投げ続けるのである。それに比べ他のダンサーの振付けは、あるいは他のダンサーへの佳代先生の振付けは華麗なまでの変化球オンパレードである。そして大半の観客はその無防備なまでの棒だま直球ど真ん中に惜しみない拍手を降り注ぐのである、変化球連発よりである。

この事実を研究所のダンサーたちは見てみぬ振りをしていとしか思えない。私がおもし彼女らの一員ならば、少女漫画のヒーロー役みたいに叫ぶに違いない。

「あの子とおんなじ舞台なんか立てない、あの子ばかりうけて・・・」

上海太郎

## いってきました！ 楽しかったよ

### 八尾養護学校 ダンスを楽しみ、心もからだも健康になろう

2007年5月15日 22日 6月5日 八尾養護学校体育館

5月22日(火)に八尾養護学校の高校2年生の生徒に「全部抱きしめて」を教えに行きました。先生方は先週も行っておられて、私は今回が初めてでした。10時30分ぐらいから体育館で待っているとすごく元気よく「6人のダンスの先生こんにちは」と言ってきてくれたり、先週覚えた踊りを見せにきてくれたり、何も話さないけど笑顔で近づいてきてくれたりと、始める前から心もなごみました。私がダンスを教えるというよりは、一緒に踊って楽しんでいるという感じで、一人一人のエネルギーがすごくて、たった1時間でしたが、私のほうがクタクタになってしまうほどでした。みんな一つ一つの動きに一生懸命で踊るたびこまくなっていました。来週から私は授業の関係で行けないのが残念ですが今日一緒に踊れてすごく良い経験になりました。

長谷川千夏

3回で終わってしまったのが本当に残念です。「毎日来て」と言ってくれた、その言葉を信じていつでも飛んでいくよ。今回載せられなかったのですが、内海雅子先生と生徒の皆さんが感想を書いてくださっています。次の号に掲載させていただきますのでどうぞお楽しみに！

## おしらせ 観にきてください

8月11日(土)	ピッコロフェスティバル	ピッコロシアター
8月26日(日)	ダンスブーケ	藤田佳代舞踊研究所本部スタジオ
10月7日(日)	第30回藤田佳代舞踊研究所発表会	神戸文化大ホール
11月3日(祝・土)	ふれあいの祭典	神戸文化大ホール
12月16日(日)	金沢景子モダンダンスステージ3	県民小劇場

国家あつての国民だという・・・間違っているのではないかな。国家つて人間が造ったものではないかな。でも、人間あつての地球ではないし、人間あつての海ではなく、地球あつてこそ、海あつてこそ人間。去年沖縄で偶然出会った辺野古崎のおばあちの、室の海に米軍のV字滑走路が造られることへの、命がけのそれでいてしなやかな抵抗は、思想や信条関係なしに、おばあちが正しいのだと、説得させられるものでした。その美しい海に滑走路が造られつつあるようです。生きた珊瑚をくりぬいて、ボーリングが打ち込まれたと聞くと、海と同じように美しかったおばあちはどういう思いで今も潮風にさらされて座っているのか、と今すぐ飛んで行きたい焦燥に駆られます。

責任編集 菊本千永